

日向国延岡藩内藤充真院著「五十三次ねむりの合の手」

—陸路を行く 現代語訳・解説(一)—

神崎 直美

はじめに

「五十三次ねむりの合の手」は日向国延岡藩内藤家(譜代、七万石)の藩主政順の夫人であつた充真院が執筆した四冊の旅日記(紀行文)のうち、文久三年(一八六三)の初めての旅についてまとめたものである(1)。旅の日々を実につぶさに記載しており、行程のみならず充真院の思いや御付たちとの会話がわかることや、充真院の卓越した文章と挿絵が魅力である。二〇一九年に拙稿「日向国延岡藩内藤充真院著「五十三次ねむりの合の手」小考」で、この著作の充真院の人生における位置づけや、史料としての書誌情報、文体と表記、行数、挿絵の描写の特徴、挿絵の分析などを明らかにすると共に、文学作品として文章表現を味わうために原文と私が作成した現代語訳と解説を若干ではあるが紹介した(2)。その後、二〇二二年より城西大学での講義「近世の日本史」IIで、「五十三次ねむりの合の手」の原文を受講生とともに音読し、私が作成した現代語訳と解説を基に、日本史と日本文学を融合した授業を試みとして始めた。「五十三次ねむりの合の手」の魅力を広く知っていただくためにも、原文と共に現代語訳と解説を施した書物を作成したいという夢を抱いている。

そこで、「五十三次ねむりの合の手」からこれまで私が現代語訳と解説を手がけていない部分から、特に注目したい箇所を抜粋して、その原文と私が作成した現代語訳と解説を紹介することにした。今回、本稿の対象として選んだのは、名残を惜しみながらの旅立ちの場面と、箱根路と温泉宿福住について、畑宿・箱根権現・関所などである。なお、現代語訳の先行研究としては伊能秀明氏・小倉葉子氏・永田由香利氏・桑原理恵氏らによる「現代訳 『東海道五十三次ねむりの合の手』のおかしみ―幕末大名夫人の気ままな旅日記の世界―」に、「五十三次ねむりの合の手」から十六箇所を選び現代語訳を試みた成果が掲載されている。伊能氏らが扱った箇所と重複を避けることを原則としたが、主語の補いや表現により現代語訳として異なる味わいになる箇所については本稿の対象とした⁽³⁾。

本稿ではまず充真院の原文を掲げ、続いて私が考案した現代語訳と解説を付す。原文には私の解釈による読点を施し、踊り字は該当する文字をあて、欠字は（ ）で補い、旧字は常用漢字で記した。充真院の文語体の原文を眺め、現代語訳により読者各自の脳裏に情景を描きながら充真院の旅に同行した気分を味わい、解説から幕末における大名夫人の旅の日々をめぐる諸状況や背景をご理解いただければ幸いである。

一 名残を惜しみながらの旅立ち

① 冒頭

原文 諸家にて我も我も立出るゆへ、何事も無うちに立め、今に軍はちまるとの事、立さる前にそうそう敷成たらは、

我身を初女子之分はみな玉川辺のめくり沢てふいふ所迄立のくつもとて、前の図座向迄も越、其少しは其支度はかれ是と相談なとし、秋にもなり出立の心くみの所少しも早ふ支度して延岡へ行かたよかるへしとの事、初に参り候はんといへる言葉あれば、いやとも云かね、ひたしき方へもいとま乞もなさて、やうやう少しのひま有日、御寺へのみまふて、六十地余りに成て馴しあつまの住居さへもならぬといふ世の中なみたさしくむ計、最早よめいもすくなきに、はるはるの海山を越て住居おはると思へは、なくなく卯月初六日に此地を発そくと定、秋には少しは供立と諸家なみにしと思へる事も整かね、此度のさはきはつかの支度して極々の忍にてとの事、色々表方はむつかしく何事もむり計多、夫に孫娘も此二とせ計日向より呼のほせ、また江戸の所々も見せ、行義を初おしへんと思ひしかひもなく、又古郷に行といへるも、昔よりのやくそく事と思、

現代語訳 他の大名家の奥方たちが、先を争うかのように江戸屋敷を離れて領地に転居していく。私たちもまだ情勢が悪化しないうちに江戸を出発すること、今に江戸で戦いが始まるに違いないので出発前に江戸が不穏になったならば、私をはじめ我が家の女性たちは全て多摩川の側の廻沢に転居する予定をたてていた。転居先の屋敷の図と室内の見取り図も届いたので、廻沢に移る準備をする相談を進めていた。秋に廻沢の屋敷に転居する心づもりでいたが、状況が変わり少しでも早く準備をして延岡に転居する方がよいということになった。

初めて延岡の地に行くことになるが、転居したくないと言ふこともできず、親しい人たちに別れを告げることができない。ようやく少しばかり暇な時間ができたので、江戸の菩提寺だけへはお別れの参拝をすることができた。思いがけず六十歳を超えてから、住み慣れた江戸屋敷で生活ができなくなるという世情に、涙が流れるばかりである。もう、余

命も少ない身であるのに、遠い延岡まではるばると海や山を越えて旅をして、江戸屋敷から追われる境遇を思うと泣きたいほどの気持ちであるが、四月六日に江戸を出発することに決めた。

秋に出発するならば、少しは御供を他の大名家と相応に整えることができると思うが、それは叶わない。この転居のための旅は僅かな御供や荷物だけを準備して、極めてひっそりと目立たぬようにお忍びとして移動することにした。上屋敷の役所から届く指示はいろいろと厳しく、私たちの意向は万事において無理で叶わぬことばかりであった。それに孫娘の光をこの二年程、日向国延岡の屋敷から江戸に転居させて、江戸のあちこちを見聞させ、さらに行儀作法をはじめ教育していたのに、それも中断することになってしまった。一方で、領地に移動することは、武家としては参勤交代のように昔からの約束事であると思うことにした。

解説 文久二年（一八六二）に江戸は不穏な状況に包まれた。戦いはじまるかもしれないが、危険を回避するために、江戸屋敷に住んでいた大名家の家族たちは慌てて江戸屋敷を離れ、領地に旅立っていった。充真院や孫娘の光（実は姪）、そして御付の女中たちは、当初は廻沢に転居する予定であった。廻沢とは、現在の世田谷区千歳台である。充真院の実家である近江国彦根藩井伊家（譜代、二〇万石）は世田谷に飛地を有していたので、その所縁で廻沢に避難する予定であったのだろう。当初は同三年の秋に廻沢に転居する予定で、建物の図、見取り図などが充真院のもとに届けられたが、江戸の様子がますます危険になり、急遽、予定を変更して延岡に転居することになった。実家と縁のある廻沢ならば、江戸屋敷から離れたとはいえ心強くもあつただろうが、突然、見知らぬ遠い延岡へ旅立たねばならなくなったことは、思いもよらぬ展開で充真院は悲しんだのである。しかも、充真院は井伊家の江戸屋敷がある桜田で生まれ、近隣の虎ノ

門に上屋敷がある内藤家に嫁ぎ、その後、内藤家の六本木にある下屋敷に住居を移したが、六十歳代まで江戸に住んでいた。長年親しんだ江戸を老年期になつて立ち去らねばならないこと、見知らぬ土地に転居しなければならないことは、充真院にとつて悲劇以外の何物でもなかったに違いない。急な延岡への旅であるためお忍びとしてお供や荷物も最小限にせざるを得ず、家格を重んじる当時としては異例な旅立ちとなつた。充真院は万延元年（一八六〇）十二月に、延岡で生まれ育つた孫娘の義、後に改名して光を当時の居所である六本木屋敷に呼び寄せ同居して、光に行儀作法や躰、教育を施し、機会があれば江戸の町を見聞させていた。光を江戸に転居させたのは、当時男子の跡取り候補が不在であつた内藤家が、養子を迎えて光の許婚として内藤家の家督を継がせようとしたからである。ちなみに光と結婚する予定の養子とは、遠江国掛川藩太田家（譜代、五万石）から当主資始すけはらの十七子である寛次郎である。万延元年（一八六〇）九月に寛次郎を養子に認める許可が幕府から出て、翌年文久元年（一八六一）三月に寛次郎が内藤家の上屋敷に移り、文久二年十月に内藤家の家督を相続した⁴。この養子が結果として最後の藩主となる政舉まさかみである。

② 四月五日 旅立ちの前日

原文 五日になれ持行荷物さへもなれぬ事ゆへ、おもすきると入かへよ杯いわれ、其晩迄大さわき、名残とて御酒・肴等も出せる計、誰一つたへて居人もなきくらひ、大方は舟廻しにつめと、長の旅路故、入用の物は取おとさぬ様にとしまつしぬるうちに、段々夜は更、

現代語訳 五日に転居の旅に持参する荷物を点検したが、旅の荷造りに慣れておらず、「梱包した荷物が重すぎるの

で、運び易い重さに荷物を詰めなおしてください」などと言われて、夜まで大騒ぎで準備をした。江戸で過ごす最後の夜なので、お別れとして酒と肴が皆に振る舞われたが、誰も手をつけることが出来ないぐらい荷造りが忙しかった。大部分の荷物は船で運ぶことになった。長旅なので必要な物を入れ忘れないように気を配りながら荷造りをしているうちに、次第に夜が更けていった。

解説 出発の前日の夜まで、一同は荷造りに翻弄された。慣れ親しんだ六本木屋敷最後の夜に振る舞われた酒や肴を楽しむことができない程、ぎりぎりまで荷作りでたいへんだったのである。充真院一行は旅に必要な最低限の身の周りの品を荷物として持参し、それ以外に六本木屋敷での生活で用いていた多くの調度品は船で運んだのである。転居のための引越しなので、船で運んだ荷物は相当の量であったことは間違いない。

③ 四月六日 六本木屋敷から出発

原文 此屋敷を跡にして行事見ゆれば、名残もおしまるる故、明行前に立つもりの所、右やうなるしまつゆへ、中々立事も出来ず、夫に雨ふり出、雨具用意にても初ての事ゆへいろいろこんさつし、其うちに明わたりてもま立やうに成かね、去ながら江戸の内にて揃候ゆへ、致方よく、道中にて是程の事なしたらは、さそなこまり候事申しぬ、夜明ても立ぬと聞て、とらの門より御隠居名残おしとて御出故、又も逢みん嬉しくて花向けとて肴代なり、いつ迄おりても名残は尽し、供揃よくとて役人共もいとまこひに来れるにもあひて、立出る頃はますます雨も降つよく、いつれ其うちにめてたふ延岡にてあわん杯云残し、そこそこにし駕籠に乘移り、立出る比は五ツ過にも成候はん、屋敷を立出る時は、何

にたとへん事もなく、只々涙に目もふたかり、あたりもおほへすて行候、

現代語訳 住み慣れたこの六本木屋敷を旅立つ折に屋敷を目にすると名残惜しく思うであろうから、まだ朝があけな
い暗いうちに出発するつもりでいたのだが、前述したように出発の前日まで荷物をまとめるのに夜までかかってしまっ
たためなかなか出発できずにいた。しかも、雨が降り始めてしまい、御供たちが雨具を身につけたり旅の荷物に装着す
ることも初めてなのでいろいろと混乱しており、そのうち夜が明けてもまだ出発することが出来ない。しかしながら、
江戸の町を進むうちに行列が揃えばよいので、「今はひとまずこれでも良いでしょう。しかし、旅の途中でこのように
出発が出来ない程混乱したらさぞ困るでしょう」と話した。私たちが夜明けになってもまだ出発していないことを、当
時藩主の座を政舉に譲り隠居していた政義が伝え聞いて、虎ノ門の上屋敷から別れを惜しんで六本木屋敷にやってきた。
既に別離の挨拶を済ませていたが、再び政義が逢いに来てくれたことがうれしく、さらに政義から餞別に着代を戴いた。
いつまで居ても名残が尽きず、そのうち行列に加わる御供たちが揃い、役人たちが暇乞いにやって来た。出発する頃
は、ますます雨が激しく降りはじめた。私は「いずれそのうち、無事に延岡で再会しましょう」と政義と最後に言葉を
交わして、慌しく駕籠に乗り込んだ。出発する時間は午前八時過ぎになった。六本木屋敷を出発する時の気持ちは言葉
にできないほどで、ただひたすらに涙があふれて目を塞ぐばかりである。それ以外のことは覚えていないが、屋敷を後
にして旅が始まった。

解説 前日の夜まで荷造りが終らず大慌てしていたが、出発当日も昨日と同様に混乱をきたしてなかなか出発の用意
が整わずにいた。充真院は天保九年（一八三八）から六本木屋敷に居住していたので、およそ四半世紀もの長きにわた

りこの屋敷に親しんでいた。辺りが明るくならないうちに出発して屋敷を目にしないうちにする予定だったのは、名残惜しさが尽きない充真院の希望による。なかなか出発しがたく過ごしているうちに、内藤家の役人たちがお別れの挨拶にやってくるなど、別れを惜しむ人々が尽きない。既に別れの挨拶を済ませた政義が、当日の朝に充真院らの旅立ちが遅れていることを知り、わざわざ六本木屋敷にもう一度会いに来たり、充真院と政義が延岡での再会を誓う言葉を交わしたりしている様子から、実の姉弟（内藤家においては養母と養子の立場）ならではのあたたかな心の交流がうかがわれる。あいにく激しい雨中での旅立ちとなったのは、江戸を離れる悲しみで涙にくれる充真院の心情と共鳴しているかのようなのである。当時の旅は日の出と共に出発して、日が暮れる前に到着する。旧暦の四月初めは、現在の五月中頃である。日の出は五時頃であろう。充真院一行は出発を予定していた五時頃から、用意が整わなかったり、別れを惜しむ家人や役人との挨拶をしていたために、実際にはおよそ三時間も遅れて出発することになったのである。

④ 高輪まで別れを惜しみ見送りに来た人々

原文 少し心付何方哉と思ひ見れば、海之気色見へる、もはや高なわへ来ると思、雨はますます強ふりしきり、猶いろいろ思ひつつけ行、跡よりごやごや人声しぬれば、目をととめ近く成をみれば、今村錦・伊藤久・子供兩人、はだしにて、佐山・藤田・もと・加藤・つる也、皆、見送りの為、小休まで行、きのふは行といへど、此雨にてはよもや来るましと思ひしに、早朝より道にて手間とり、其うへ下駄損して由、やうやうお出ましとの事、定めし金やと思ひしに、夫よりは余程遠き所に小休す、先、籠駕より出んと思へど、皆おかれてこさる由に、かこの戸引もの有、誰ならんと思

ひしに菊枝にて、さき程より此所に出、御待申上居との事、尚格安内し、きく江にひかれ座に付、しはらくして砂野・初、来り、今見し五人の者も爰につとひ、けふ雨ことにふり強こまりし事共咄し合、

現代語訳 先ほどまで悲しみにくれていたが少し心が落ち着いてきたので、「今、どのあたりにいるのだろう」と思
い駕籠の中から外を眺めると、海の景色が見えた。もう、高輪まで来たと思つていると、雨が先ほどよりも一層強く激
しく降り注いでいる。引き続きいろいろと思いをはせながら駕籠で進んでいると、後からがやがやと人の声がある。声
が近くなつたのでそちらに視線を向けると、今村錦と伊藤久、さらに子供二人が裸足で駕籠の側に居り、さらに佐山・
藤田・もと・加藤・つるなどもいた。皆、私を見送るために、小休憩をする所までやってきたのである。皆は昨日、出
発当日の朝に屋敷を出発した次の小休憩の場所である高輪まで見送りに来ると言つていたけれど、これ程激しい雨が降つ
ているのでいくらなんでも見送りにこられないだろうと私は思つていた。皆は、早朝から見送りをするつもりで出發し
ていたが、途中の道で予想以上に時間がかかり、さらに下駄が壊れてしまいやつとここまで来たという。小休憩をとる
のはあらかじめ決めていた釜屋と思つていたが、釜屋よりかなり遠い所で小休憩となつた。まず駕籠から降りようと
思つたが、御付の女中をはじめ他の人々が遅れてここにいなかった。しかし、私の駕籠の戸を引いて開けてくれた者が
いる。「誰だろう」と思いながら見ると、菊枝であつた。菊枝は少し前からここに来て、私が来るのを待つていたとい
う。尚格が案内してくれ、菊枝に手をひかれて座敷に上がり座つた。しばらくしてから女中の砂野と初が到着した。つ
い先ほど遭つた佐山・藤田・もと・加藤・つるなど五人もこの座敷に集まり、今日、雨がとりわけ激しく降り困つたこ
となどを話しあつた。

解説 六本木屋敷を出発して大木戸がある高輪まで来た。ここでいよいよ江戸府内から出ることとなる。高輪大木戸は東海道を上る旅人を送るために、親しい者たちが見送りに来て水盆を交わす場所である。『江戸名所図会』にも描かれた江戸名所の一つでもある。充真院を追って来た女性たちは、おそらくかつて充真院の御付の女中をつとめた者たちであろう。ここに名前があがっている者たちは、昨日（五日）充真院と会い、既に別れの挨拶をかわしているが、さらに当日、小休憩をする高輪まで見送りに来ると充真院に伝えていたのである。激しい雨の中、ぬかるみ足場の悪い道を高輪まで来るのはたいへんで、しかも下駄が壊れてしまい裸足で歩かざるを得ない者もいたが、それでも充真院を見送りたいと必死でやってきたのである。激しい雨が降りしきる中、一行の行列が乱れ、先頭の充真院の籠駕が到着した際に、後に続くはずの者たちがまだ到着していなかった。通常は充真院が籠駕から下りる時には、御付の女中が籠駕の戸を外から開けるが、その女中もまだ着いておらず、充真院は籠駕の中で待つつもりであったが、先回りしてこの休憩地に到着していた菊枝が戸を開けてくれた。座敷に案内してくれた尚格とは、充真院の侍医をつとめる喜多尚格である。本来、尚格の籠駕は行列の後方であるが、遅れる者たちを追い越して充真院についてきたのである。菊枝に手をひかれて座敷に移動した充真院は、しばらくの間、見送りに来た女性五人と激しい雨のことを話したりしながら、名残を惜しんだのである。

⑤ 内藤家と井伊家の人々の見送り

原文 とらの門・桜田よりもおくりの人参り御くわし、さはら田よりはみそつけ鯛一曲被下候、右之人にも逢て御礼

申ぬ、泰三郎弟も参り菓子を到来し、参りし人に右之くわしひらき遣し、今迄勤居し若吉と名残おしみ是迄参る、名残は尽し、早く立はやとて、今迄深切につかひし挨拶し、猶身いとへよ杯いひて、男子向は雨のおやまぬに、みの笠着かへるうちも、皆一生のわかれとて、涙さしくむ計、

現代語訳 内藤家の虎の門にある上屋敷と充真院の実家井伊家の桜田にある上屋敷からも、見送りの人々が私たちを追いかけてやってきた。内藤家からは御菓子、井伊家からは曲げ物に詰めた鯛の味噌漬け一箱を私に餞別として届けてくれた。餞別をくれた人たちに私は直接会って御礼を伝えた。御供の佐久間泰三郎の弟もやってきて、御菓子を届けてくれた。この御菓子はすぐに開けて、お別れに来てくれ人々に分け与えた。今まで六本木屋敷で働いてくれた若吉も名残を惜しみここまでやってきた。高輪まで別れにわざわざ来てくれた人々と十分に名残を惜しみ終え、「早く出発しましょう」と高輪を発つことにした。私は別れに来てくれた人々に今まで親切に仕えてくれたことに感謝する挨拶をして、さらに「お体を大切にするように」などと声をかけた。雨が一向に止まないもので男性の御供の者たちが蓑笠に着替える少しの間にも、お別れに来てくれた両家の者たちと今生の別れになると思うと、涙が流れ続けるばかりであった。

解説 内藤家に加えて実家の井伊家の者たちも、高輪まで餞別を持ってわざわざ見送りに駆けつけてくれたのは、当時、充真院が延岡に転居したら二度と江戸に戻れないと思っていたからである。餞別の品を届けてくれた中に、充真院様御用達・御姫様御用達兼帯をつとめる佐久間泰三郎恭明の弟もいた。この旅で佐久間泰三郎は充真院の駕籠脇の筆頭として道中で身近に寄り添い警護を勤めた。佐久間は安政元年（一八五四）から充真院の御用達を勤め、文久三年には充真院に仕えるようになり九年目となるので、充真院と気心も知れていたことであろう。この旅において佐久間が駕籠

の外から充真院と話をしたり、充真院の様子を氣遣った様子が後に記されている。別れの際に体を大切にしようにと、具体的に交わした会話も添えられている。いよいよ発つ決意をしても、これが江戸の人たちとこの世での最後の別れと思うと涙が止まらず、それに呼応するかのように雨も降りしきりやまず、悲しみが彌増すばかりであった。

二 箱根路と温泉宿福住

① 四月十日 (五日目)

小田原城下から箱根へ

原文 朝曇り、昨夜申され候まま、少しも早き方宜敷と思ておき出、支度して、いさや立出はやと表方せつきし所いつかふ供揃はず、早おきせしかひもなくとつふやきし所、山はあけねは足もと見へすとて、しらむを待との事、さらはそのやうに申さすともよかりしにと人々いひて、やうやう明行てより宿を立、又先払も出て程なく大久保家の大手前を行、御城はなるとさくの様成御門有て夫を出、御城下と成と、人も知れるういろと云茶や有は、是は八ツ宸作に候間みよと知らせにて、屋根は御城の様にてりつは成る、ここを過て少し行と箱根山にかかるとおしへられ、見るとささやか成木戸有て、木立おひかさなり有、地には平石を以敷ならへ、左右に大きやうなる石、山より半分計も出て有てつまさき上り也、出である大石色々成いろにてほくほくと出て、ややともすれは、まるひ落もすへきやうにて思へるに、人々のいへるには道悪くして歩行もむつかしくとの事、との様かと思へる所、さのみにもなくと思ひし所、近比の

御上洛にて道大きに直候由にて、夫故か聞しには似す、宜おほへ行くにつれ、石ますます大き成出居、馬杯よくおも荷をおひ行かひすと思へは、哀に見つつ人々声かけつつくるしそふに上り行、

現代語訳 朝の天気は曇、昨晚も表方から早く出発すると言われていたので、少しでも早起きした方が良いだろうと思ひ起床して、宿を出発できるよう身支度などを整えて、「さあ、出発しましょう」と表方に催促した。しかし、いっこうに表方の者たちが出発する準備をしない。私は「早起きした甲斐がない」とつぶやいたところ、「山道を進むので、夜が明けて明るくならないと、足元が見えないので、明るくなるのを待つて出発します」と表方が言った。「それならば、昨晚、翌日は朝早く出発すると言わなければいいのに」と御付の女中たちが言った。ようやく明るくなったので、宿泊していた本陣を出発した。昨日と同様に行列の先頭に先払いが先導しながら進むと、すぐに小田原藩主大久保家(譜代、一〇万石)の小田原城の大手門の前を通過した。小田原城を離れると柵のような門があった。この門をくぐり城下町を行くと有名なうしろ(外郎)を販売している茶屋がある。「この店は八棟造りなのでご覧下さい」と駕籠脇に控えている者が充真院に声をかけたので、駕籠の窓を開けて眺めると、この茶屋の屋根は御城の様な造りで立派だった。さらに、「茶屋の前を通り過ぎて少し進むと箱根山に入ります」とも教えられたので見てみると簡素な木戸があり、これを通りすぎると木立が鬱蒼と生い茂っている。地面には平らな石を敷き並べてあり、道の左右には大きな石が山から半分程出ており、上り坂になってきた。山から出ている大きな石は様々な色であり、それがあちこちから出ており、どうかすると転げ落ちそうだと思った。これまで箱根の山道は足元が悪いので歩くのはむずかしいと聞いていたので、どのような状態なのだろうかと心配していた。しかし、実際に来てみるとそれ程ではないと思ったところ、この少し前に

將軍―十四代將軍家茂―の上落のために道を広くして整備したと聞かされた。かつて聞いていた箱根路の様子とは似ておらずよかったと思つた。進むにつれて周囲に見える石は、ますます大きいものが山から突き出ている。このような道を馬などはよくぞ重荷を背負い通行していると気の毒に思う。通行する人々は声をかけながら苦しうに上り坂を登つて行く。

解説 旅の一行は表方と奥方からなる。表方はこの旅における男性の家臣であり、奥方は充真院と女中たちである。両者の間に前日の晩における意思疎通の欠如があり、小さな齟齬が生じた朝のひとこまである。旅の日々は、朝、空が白みはじめたら早々に出発するのが鉄則と充真院らは心得ており、この数日、そのように過ごしてきた。しかし、この日は充真院をはじめ女中たちが早起きして出発の仕度をしたにもかかわらず、男性の家臣たちは出発の用意をしていなかった。表方はこの日はすぐに箱根の山道を進むので、充分明るくなつてから出発する予定だったが、奥方には早く出発すると伝えてしまったのである。充真院が「早起きした甲斐が無い」と、実に珍しく小さな不満をつぶやいたのは、日常とは異なり早起きが続く旅の朝が五日目となり、早起きをする辛さや疲れが心身にこたえてきたからであろう。小田原城下についてはあつさりとした記述であるが、名物の外郎の店については御付の者から見るとに促され、駕籠の窓を開けてまるで小さな城のような破風が連なる八棟造りを眺めた。外郎の店はいらうと称する菓の透頂香と米粉を蒸した御菓子名物であった。外郎の店は現在も家業を継続しており、建物はその後の再建であるが、充真院が目にしたような堂々たる城のような造りである。

小田原城下を通り抜けると、ここから東海道は箱根の山道であり巨大な岩が斜面からあちこちに突き出している様子

を充真院は眺めた。思いの外、道が整備されていたのは、十四代将軍家茂の上洛に先立ち街道を整備したからである。家茂は文久三年二月十三日に江戸を出発し三月四日に京都に到着、二条城に入城していた⁵⁾。将軍の上洛自体、二二年ぶりのことであり、極めて十分に街道の整備がなされたことであろう。充真院らは整備から間もない、たいへん良い状態の箱根路を通行したのである。

② 御供への思いやり・江戸の方を眺め悲しみにひたる

原文 ことに天気もくもり降もすらんと思へは、皆々のこまらんと思ひ、まつまつけふはみの笠用ひさる計もよしと思つつ山を登りて、もはや此山きり江戸の方は見へすと聞は、少し駕籠を留て見おろし、帰らん事は出来ぬなから何となくかなしうて、袖ぬらしつつ山中にて初てほとときすを聞く、

現代語訳 その上、天気が曇りで雨が降ったならば、一行の者たちが困るだろうと思った。何はさておき、今日は蓑笠を用いることがなければよいのに、と思ひながら箱根の山を登っていく。「もう、この山が江戸の方が見える最後の地です」と御付の者が言うので、少しの間、駕籠を止めてもらい、眼下の遙かな江戸の方を眺めた。私が生まれ育った江戸には帰ることは二度とないので、何となく悲しみがこみあげて涙がこぼれた。とめどなく流れる涙を袖で拭っていると、箱根の山の中で不如帰の初音が響くのを耳にした。

解説 箱根の山中を進むと天候が曇り始めて雨が降りそうな雲行きであった。充真院は御付の者たちが雨の中を進むことを気の毒に思い、雨具を用いることがなければよいのにと、思いやっている。充真院の優しい思いやりの心が窺い

知れる。御供の者が充真院にかけた言葉も興味深い。当紀行文には時折このような会話が記されている。江戸で生まれ育った充真院にとつて、見知らぬ遠い延岡へ転居し再び江戸に戻れないことは、悲しみ以外の何ものでもない。心細くもあつただろう。涙で袖を濡らしている折に、不如帰の寂しげな鳴声が聞こえ悲しさが増すばかりであつた。

③ 温泉への思い

原文 兼て温泉に行度と思ひけれど、時節来らず、心願のみにて其事もはたさるに、こたひはせひせひ行はやと思ひけれども、かまくらへさえも参詣成かねし事なる、温泉に行度とも云出かねながらも、延岡へ行ては猶々行かねしまま、湯本迄行は湯之有宿に休に成候はば、せめて其やうす計も見度と申出したる所、温泉場は通りより入込し所なれと、近き所にも有ゆへ、少しのまはりゆへ、夫にて昼休にせんとの事、嬉しくて段々山中を行に、向に流有て橋かかり有所を見乍、右之ほそ道に入、十町計も行間はやうやうと駕籠小笹にすれるくらひの所も有、又両方より木茂る、左之方谷のけはしき流に橋かかり、其向は高山山水の気色いわんかたなく見つつ行は、湯場成福住といへる家之向に見ゆるとの事、

現代語訳 以前から、温泉を訪れたいと思つてはいたけれども、その機会が得られなかった。心の中で温泉に行きたいと願うばかりで今まで実現しなかったが、今回は是非とも旅の途中で温泉に行きたいと思つた。しかし、内藤家の墓所がある鎌倉の光明寺に道中で参詣に立ち寄ることすら叶わなかったので、温泉に行きたいとは言い出せなかった。しかし、遠い延岡に転居してしまえば、一層、温泉に行くことは出来ないままとなつてしまう。そこで、「箱根湯本まで行つ

たら温泉がある宿で休憩して、せめて温泉の様子だけでも見てみたいですよ」と申し出てみた。すると、「温泉場として知られている所は通りから奥まっています、近いところにも温泉があるので、少しだけ廻り道をしてそこで昼休みにしましょう」と表方の者から返答があつた。温泉に立ち寄るといふ希望が受け入れられ、うれしく思った。どんどん山道を進むと、向かいに川があり橋が架かっている所を見ながら、右の細い道に入った。そこから十町(約一、〇九km)程進む間は、周囲に生えている小笹が駕籠に触れる程、整備されていない道が続く所もあつた。また、道の両側から木が生い茂り、左側は谷があり川の険しい流れに橋が架かり、その向かいには高い山がそびえ溪谷に流れる川の様子が何とも言葉尽くしがたいほど美しい。その気色を眺めながら進むと、「温泉のある福住という家が向こうに見えてきました」と御付の者が言った。

解説 充真院は長年、温泉に行きたいと思ひながら、六十四歳であつた当時もその望みが実現していなかった。日頃、自由な旅が望めない立場である大名家の夫人の充真院にとって、温泉に行くことは夢の一つだつた。ところで、ここで言う「かまくら」、すなわち鎌倉とは内藤家の菩提寺である相模国鎌倉材木座の光明寺のことを指す。内藤家の家人、及び家中の者たちは、光明寺を「鎌倉」と称することがよくある。二度と江戸に戻る事が無い転居の旅であり、光明寺とその墓所に眠る人々に別れの参拝をしたのだが、急遽、旅立つこととなつたため、旅の途中に立ち寄ることができなかつた。充真院はそのことを申し訳なく、さらに残念に思つていたのである。菩提寺にさえ参拝できずに旅を始めたので、なおさら温泉に立ち寄りたいとお供の者に希望を表明することはためらわれた。しかし、延岡に転居してしまえば二度と江戸に戻れず、箱根の温泉を訪れることはありえない。そこで充真院としては実に珍しく、自分の願望

を御付の者に伝えたのである。その結果、通りから近い温泉で昼休みをすることとなり、充真院はとても喜び「嬉しくて」と気持ち素直に記した。向かった先は箱根七湯の一つの湯本にある福住である。寛永二年（一六二五）に創業した老舗の温泉宿である。福住に向かう道の景色を充真院はよく見詰め、山々と溪谷の美しい風景の様子を書き留めていた。福住は湯本村の名主家であり名家である。幕末に家業が衰退していた折、家の再建の為に、報徳仕法の実践・研究者、かつ農政家、実業家として名高い後の福住正兄を養子に迎え、家業の復興を果たした。充真院が福住に立ち寄った頃、正兄が当家の当主であった。現在、明治時代に建築した「萬翠楼」と「金和楼」が国の重要文化財に指定されたことと知られる名旅館である。

④ 温泉宿福住

原文 作さまざまりつはにて、前は岩たたみ、流の中に石出て、夫に水当り白波立所誠によく、上よりは山の木枝下り、下は流すさまじき気色乍、此様成所は初て珍らしく、福住なる門に入は山中のやうにてはなく、其風流なる事いわんかたなく、人々遊ひながら暑分は行との事、一たひ行は又と思ふも尤と思ひつつ、玄關のやう成所より上り、縁つたひに幾間も幾間も行て、少し小高くしなしたる座敷に一、二、三ノ間有、ここに座し向ふを見ると、今来りし橋をおくれし供之者とをり、又遊山に来りし人ならん、田舎なる人とも見へさるも往来り、山中とは思はれず、山中に此やう成家とも幾所も有由、

現代語訳 向こうに見える福住の建物は立派であり、その手前の河原は平らな岩で、川の流れの中には石があちこち

に出ており、それらの石に川の水が当り白波が立っている様子は風情がある。上流の方は川に迫る山の木の枝が川面近くに下がり、下流の流れは激しくすさまじい様子である。この様な景色は初めて目にするので珍しく思った。福住の門に入ると山中の様ではなく、風流な様子であることは言葉にならないほどである。この宿に人々が暑い季節に遊びがてら来訪するという。一度訪れると、又訪れたいと思う宿であると説明を聞き、実に尤もだと思いつながら玄関の様なおから建物内上がり、縁伝いに幾つもの部屋の横を通り奥へ進むと、少し小高い所にある座敷に一の間・二の間・三の間があった。ここに招かれて座り部屋の外を見ると、今、私たちが通った橋を遅れた御供が渡っている様子が見えた。また、行楽のために来訪した人であろう、地元の人には見えない人たちが行きかかっており、山中とは思われない。山中にこの様な温泉宿が幾つもあるという。

解説 福住の屋敷は外観も敷地内の様子も、大名家の家人である充真院が感心するほど実に立派であった。充真院は屋敷の前の川の様子もよく眺めて、その風景を書きとめている。この川は早川である。川の流れも、江戸屋敷での日常では目にする機会はなかったもので、充真院は感動したのである。充真院は福住の屋敷前の早川と屋敷の外観を挿絵に描いた。挿絵によると、黒塀で囲まれた屋敷に門が三つある。充真院そのうち一番大きな門から敷地内へ入ったのである。玄関から屋敷内を進み招かれた部屋とは、挿絵の右側にある門に近い沓脱石のある建物である。当宿で一番格式の高い建物に通されたのである。この建物は少し小高い場所にあるので、敷地内の庭に加えて塀をめぐるさせた敷地の外の橋までも見渡せたのである。

⑤ 短歌を記した短冊の貼り交ぜに目をとめる

原文 又、小座敷には江戸なる歌人のより合成たにさくのほりませ、是は夏陰・定良・游清を初、我知れる人書たるの多ゆへ、ここにてあへる心地しておもしろく、昔恋しく思ひていとどめもとまり、其かたはらには三曲かさり、又、かけなる座敷には碁しやうき盤(盤)一けんきん杯有、客のつれづれ慰の為成へし、との間にも座に入すして縁つづき行るる様に作なし、夫より直々湯にゆかるる様に成て、我居し次の中庭は竹うへ、上の座敷は八畳にして、床・違棚有て上段也、

現代語訳 小座敷には江戸の歌人らが集まり短歌を詠み合つた際の短冊を貼り交ぜたものがある。夏陰・定良・游清をはじめとする私が以前から知っている歌人らの短歌が多いので、この箱根の山の中で作者らに出会つたような気持ちでして趣があり、それらの作品に親しんでいた当時を恋しく思い、しばらく眺めた。その傍らに三曲―三味線・箏・胡弓―が飾つてある。また、納戸のような座敷には碁・将棋盤や、一弦琴などが置いてある。客が暇な時間に楽しむためである。どの部屋も他の部屋に入らないで縁伝いに行き来できるように作られている。そのため、それぞれの部屋から他の部屋を通ることなく直接温泉に行くことができる。私が招かれた部屋の間(二の間)の中庭には竹が植えてあり、上の座敷(一の間)は八畳で床の間・違棚を設えた上段の間である。

解説 充真院は文学を愛好しており、短歌はその一つである。短歌を自らも詠み、他者の短歌を読むことも楽しんできた。福住の小座敷に短歌をしたためた短冊の貼り交ぜがあることに充真院は目をとめた。この貼り交ぜは屏風か、襖か、または掛け軸なのかは、充真院が具体的に記載していないので不明である。当時著名な歌人の作品を貼り交ぜにし

たものであり、短歌に親しんでいた充真院は初めての地で思いがけず旧知の人に再会したよううれしく懐かしい心地を味わった。短歌の作者である夏陰・定良・游清とは、木村定良、本間游清、前田夏陰のことである。木村定良は江戸生まれの国学者（弘化三年〔一八四六〕没）、本間游清（安永五年〔一七七六〕〜嘉永三年〔一八五〇〕）は国学者で医師でもあり、歌道と医術で伊予国吉田藩に仕えた。なお、游清は国学と歌学を和学三大家の一人である村田春海に学んだ。前田夏陰は江戸の国学者でその師は清水浜臣である。

客が余暇を楽しむために碁や将棋、一弦琴が用意してあったことにも充真院は目をとめたが、室内の品物以上に部屋の造りに心魅かれている様子が伝わってくる。

⑥ 温泉に向かう

原文 湯場へ行には、いく間もいく間も廊下つたひに行て箱段をおり、右手之方は板はり、中に棚有は着物のせん為成へし、向は御手水つかふ様になかしにして、下竹すに成、手水鉢よりはたへす水流落るわきに真中の湯とうたらい有、左之方は湯ふねにして前にまく張てあり、湯に入人有時は見らぬやうにおろすとの事、湯之内は二段計段をおりると一面に湯にて、真中に一間四方程は別て深く成、夫にすはれはかたすくる程、ふちのあさき所はすわれはこし迄くらひ、角に小角之所は湯流れ口哉、ぬかつかひ少しにこると思へは直に角より流、

現代語訳 温泉は何部屋もその横にある廊下を進み、箱段（木製の階段）を下りた所にある。その右側は板張りで、中に棚を設けているのは脱いだ着物を置くためである。向こう側に手を洗うための流しがあり、足元には竹簾を敷いて

ある。手水鉢からは絶えず水が流れ落ち、その脇に「真中の湯」がある。この温泉は左側に湯船があり、その手前に幕が張つてある。幕は入浴する人がいる時に外から見えない様に降ろすのである。風呂場は二段程、段を下りると一面が湯である。湯の中央は一間（約一八〇cm）四方が特に深い。深い所に座ると湯が肩を超える程であり、縁の浅いところに座ると湯は腰までくらいである。隅の小さい角は湯が流れ出る所であろうか。体を洗うために糠を使い、湯が少し白くにごつたと思うと、直ぐにこの角から流れ出る。

解説 福住の宿は温泉まで他の部屋を通り抜けるのではなく、いくつもの部屋の横の廊下を通る。宿ならではの造りである。充真院は風呂場の脱衣場が板張りであることや、脱衣を置く棚があることも珍しく感じている。流しの足元は竹簾であることなどもよく観察している。「真中の湯」の形状に関する記述は、充真院が入湯した際に確認した様子を中心に記している。この温泉は深い所は座ると肩を超えるくらいで、浅い所は座って腰くらいであると、入湯したからこそ知り得た具体的な表現で書き留めている。なお、糠を用いて体を洗った湯が直ぐに流れ出る様子もつぶさに記している。充真院はこの風呂場の間取り図と風呂場の手前の坪庭を挿絵として描いている。挿絵によると、充真院らに向つた風呂場のすぐ手前に、建物の間に備えた坪庭がある。坪庭には池があり、池の中央には島を設けて木を植え、水を樋で引いている。この池に大きな緋鯉がいた。挿絵に添えた説明によると、坪庭の一方にも座敷があるが充真院は見にいかなかったこと、もう一方は三間程の座敷であり縁側に欄干があつたことがわかる。

⑦ 念願の温泉

原文 此湯はよひ湯故、少しぬるく候間入候はば、わかすとの事、上方之入候湯は外に有との事乍、ちよと参りし事なれば夫にも及す、入見度とは思われと右様成わけ合故、平人之入所にてよし、兼て温泉場の湯あつくとの事聞つれば、わかすに及はずと申置けは、次する人は湯に入てはおそふ成故、いらぬ方よしとて、砂野・長を・せい・秀・とき・もと・わたくしも入ぬ、成程、少しぬるくおほえしかと、温泉ゆへかわしれぬ、云程にもなく入より上る迄同しあ(つ)さに候、

現代語訳 福住の温泉は良い温泉なので少しぬるいが、入湯してぬるく感じたならば、申し出れば湯を沸かして適温にするという。高貴な身分の人のための温泉は建物内ではなく外にあるという。したがって、そこに行くには少し出かけることになる。わざわざそこまではしないで温泉を見たく思ったので、私は庶民用の温泉に入ることにした。以前から温泉場の湯は熱いと聞いていたので、沸かす必要はないと伝えておいた。御付の者までもが入湯しては遅くなるので、余計な誘いはかけないことにして、ごく身近な御付の女中である砂野・長を・せい・秀・とき・もとたちと一緒に私も入湯した。湯加減は「確かに少しぬるい」と思ったけれど、温泉だからぬるいのかはわからない。言うまでもないが、入湯した時から湯から出る時まで同じ温度だった。

解説 当時、福住の温泉の特徴は、少しぬるめの温度であることだった。さらに、福住には高貴な身分の人が利用する風呂は建物の外にあり、庶民用の風呂は建物内にあったことがわかる。充真院はごく身近な御付の女中たち六人と共に入湯したが、こういう機会は江戸屋敷での生活ではありえない。非日常の旅の途中だからこそ実現したのである。充

真院は「真中の湯」の温度がぬるいと感じながら、しかし温泉だからぬるいのかどうかは不明であると考えた。そして、温泉に入った体験としては、温度が入湯した時からあがるまで一定の温度に感じられたことをあえて記した。薪を燃やして湯を沸かしたり、高温の湯を風呂桶に汲んで入ったりする日常の風呂では、入浴中に温度が変化しがちである。入浴中に一定の温度を保つ湯は温泉ならで、充真院にとつてささやかながらも非日常の体験であった。

⑧ 部屋に戻る

原文 是へ行道の縁とうれば、らんかん付たる縁にて、中庭には泉水に大なる紅鯉多入、水はとひにてたへすかかり、ゑんの下へ水ぬける様になしぬ、元の座敷にかへり、あまり見はらしよく此様成所へ参り只帰るもおしき故、皆にも御酒遣し、我も何そ此土地の料理申附たへん物と思ひ、此宿より所之絵図と丁寧にしらへしけん玉到来す、上之方にては、御酒のみ候様にちよくなり、下の方はなみに有よりあさく、玉ののる様にしたる物、

現代語訳 「真中の湯」に行くために通った縁側には欄干がついていた。中庭には池があり大きな赤い鯉がたくさん泳いでいる。池には樋で引いた水が絶えず流れ込み、池に溜まった水は建物の縁の下に流れていく様に設えてある。休憩のために提供された部屋に戻り、この部屋からの見晴らしがすばらしいので、入湯しただけで発つのは惜しいと思い、御付の者たちに酒を振る舞い、私も何かこの地の料理を注文して食べようと思った。この宿から箱根の絵図と丁寧に造られた剣玉を贈られた。この剣玉の形は、上部がお酒を飲む猪口のような形で、下部も猪口のような形だが立ち上がりは浅く、上部・下部ともに軸に結び付けた玉を乗せるようになってい

解説 充真院らが入湯した風呂と招かれた部屋は、前述したように縁伝いに移動できた。しかも、その縁には欄干がついていた。前掲⑥の解説でふれた挿絵によると、欄干は線描で簡素な造りに見える。なお、当初は温泉に入浴するのみのつもりだったが、充真院の希望で昼食もここで摂り、酒を飲み土地の名物を味わうこととなった。福住が充真院に謹呈した絵図と剣玉とは、当地の箱根の名所を描いた絵図（刷物）と、木材を轆轤を用いて造った剣玉である。充真院が本文中に絵文字の様に描いた挿絵によると、剣玉は上部と下部が大・小の猪口の様に作られている珍しい形である。轆轤を用いて製作したのでこのような形なのである⁽⁶⁾。木工細工が名物である当地ならではの贈り物である。

⑨ 老舗の宿の美味しい食事

原文 朱ぬり内金大広婦に足附に色々の肴、小皿迄のせ、肴取時は上を手近に成やうにしたる台、思付にて、りやう理江戸に変らす風味よく皆悦、昼膳もおいしくといひし所、九ツ少し廻りし比に成しかは、男子向にて、今日は御関所七ツ過に成ては悪きゆへ早ふ立と、男は早々たうへてせつかれしまま、下之方にてはろくろくたへすにかた附て、持ゆかるる物は重杯に入て行、御酒好める者は是計は持行かれすおしきといふてつふかきつ^をつ行、

現代語訳 外側は朱塗りで内側は金を施した屏風を模した大きな足付きの器の上に、様々な酒の肴とそれらを取り分ける小皿も乗せて運ばれてきた。足付きで高さが器があるので、酒の肴を取る時に手元に近いので取り易く、その工夫に感心した。さらに供された料理の味は江戸の食事と同様に風味が良く、同席している皆が喜び、昼食の膳も美味しいと話していた。昼の十二時を少し過ぎたので、福住には同行せずに待っていた表方の男性の御供が私たちを迎えに来て、

「今日は箱根の関所を通過するのが午後四時を過ぎると以後の行程に支障が出るので、ここを早く出発しましょう」と言う。私たちに同行していた男性らは促されるまま急いで食事を終え、すぐに出発する準備を始めた。一方、その他の位の低い者たちはまだ充分に昼食を食べていなかったで、手をつけていない食事を重箱などに詰めて持つていくことにした。酒が好きな同行者は、「こればかりは持ち帰れない、もったいない」とつぶやきながら出発した。

解説 老舗の宿にふさわしい工夫された器に充真院は目をとめて感心した。しかも料理が美味しく、充真院も同席者もたいへん喜んだ。箱根湯本の地で食べた食事が美味しいのは、江戸と同じ味だからである。充真院の味の好みは江戸が基準であり、充真院の御付たちも同様であった。大名夫人、さらにその御付たちの視覚、味覚を満足させた福住の料理人の器選び、さらに料理の腕の優秀さが窺がわれる。宿でのんびりと昼食を摂っていたところ、福住に同行していなかった男性の家臣から出発の催促が来たのは、当初は立ち寄る予定がなかった温泉宿に行き、急遽、温泉に入ることを決め、宿にかけあいで承されて入湯するだけの予定だったにも関わらず、充真院が招かれた部屋とそこから見る景色のすばらしさから去りがたく思い、予定外の昼食まで摂ってしまったからである。予定外の事項が重なり、本日の行程を念頭に置いている表方の家臣は気が気でなかったことだろう。一日の行程について指示したり、充真院に意見を述べたりしている様子から、おそらくこの人物は充真院様重役副添格の斎藤儀兵衛智高であろう。福住の宿には、充真院と御付の女中たち（名前は前述）、それに若干の男性の家臣だけが同行したはずである。同行した男性の人数や名前は具体的に記されていないが、少なくとも御里付重役の大泉市右衛門明影と、充真院の健康管理を担う医者の高多尚格は同席していたと推測される。

なお、温泉及び福住の宿について、充真院はおよそ四丁半の紙面を用い、そのうち挿絵を二丁分ほどに描いた。一つの事項に費やした紙面が多く、さらに挿絵を豊かに描いたのは、思いがけず福住の宿に立ち寄り充真院が温泉に行つてみたいと長年希望していた夢が叶つたこと、さらに福住の宿が立派で見所が多く、充真院にとって印象深かつたからである。

三 畑宿・箱根権現・関所

① 畑宿で休憩

原文 早々其所を立出、元の橋ある所より向へ行、両方山と谷、水計を行しか、湯本にて色々の木地細工物有との事聞つれと、さらになしと思つつ行して、例之ねふりし物ならん、さらにおほへす、畑の小休に附、座敷へ上りぬれば、座敷には色々なるぬり物品、又木地なるも有、又かわゆらしき子供の手遊やうの品もならへ付、有とよきと思へる品もあれと、長の旅路荷に成ゆへに少し計整見すくす、庭は目の前に余程高き山有て、夫より滝四段に落、縁之端に池有て夫へ落、紅鯉一尺計成多おり、山の作さま殊之外よく、箱根山へ作かけし物ならん、夫を座敷より見るやうにひゐとろ障子也、ゑんかはは木地をぬりてつるつるとし、用所杯は皆よせ木、座敷より庭迄此やう成は初て見しと思、是を江戸へ置なは、さそなひやう判にならん、あへ川餅名物之よし到来す、此宿は鈴木と申候、天気にはなりたれとも道あしくて、長を・初、歩行せしものは上へあかりかね、あまり庭よく候まま外より廻り見に来る、

現代語訳 急いで用意をして福住の宿を落ち、先ほど渡った橋まで戻り、行きとは反対の方に向い、両側が山と谷、

川ばかりの溪谷を進んでいった。湯本は様々な木地細工が名物であると聞いていたが、想像していた程ではないと思いつながら進むと、眠たくなりそれ以後のことは覚えていない。畑宿に到着して休憩する家の座敷に上がると、座敷に色々な塗物や木地細工があった。さらに、子供用のかわいらしい玩具も並べてある。欲しいと思う品があるけれど、長旅なので荷物が嵩張ってはいけないと思い、少しだけ入手しようと思いついた。この宿の庭は目の前にかなり高い築山が迫っており、その山から滝が四本も流れている。縁側の側に池があり滝の水はその池に流れ込む。池には約三〇、三cmの大きな緋鯉がたくさん泳いでいる。築山の様子は格別に見事で、箱根山の斜面を利用したものである。

この見事な築山を座敷から眺めるために、障子は硝子を用いている。縁側は木地を生かした漆塗りですつるつるしている。御不浄などは全て寄木細工が施されている。座敷から庭までこのような趣向の造りを見るのは初めてである。このような座敷や庭を江戸で造ったら、さぞ評判になるだろう。この家から名物の安倍川餅が供された。当家の主人は鈴木という。良い天気になったが道の状態が悪いので、駕籠から降りて歩いて移動した女中の長尾と初などは足元が汚れているので座敷に上がることは遠慮したが、庭がとてもすばらしいので外から廻って庭に入り眺めた。

解説 福住を出発した充真院一行は、箱根ならではの景色を見ながら進んだ。先の湯本では充真院が気にいる様な木地細工が見当たらなかったが、畑宿で休憩に訪れた家に塗物や木地細工、子供の玩具などが様々あり、その中に充真院が入手したいと思う品が目にとまり購入した。充真院は有名な当地の名物を現地で購入することを楽しみにしていたのだろう。この際に購入した品の一つが、後に宿泊した岡崎の西本陣で充真院に懐いた少女に与えた玩具であろう。ちなみに、將軍家茂も上洛の途中、二月十七日に畑宿で小休憩をとり、当地の名産である細工物を購入している(7)。

この家の庭や室内の工夫に充真院はたいへん心魅かれた。充真院は庭について、実は文章に加えて紙面の半丁の下半分を用いて挿絵を付けた。挿絵から確認できることを補足しておこう。築山について、充真院は挿絵の添え書として「高さは見上げる程也、おくゆきは七・八間もあらんか、誠に目の前也」と、見上げるほどの高さで、しかも奥行きが約一二・六〜一四・四mもある大きな築山が、縁側から眺める充真院の目の前に迫っていると記している。築山には様々な樹木があり、枝振りから松や躑躅などが植えてあることがわかる。築山の片隅には飛石を並べた先に鳥居と御堂がある。屋敷稲荷の祠であろう。祠には鰐口が下がっている。祠の先にも飛石が続いており、さらにその向こう側にも行くことができる。築山には橋が三本と燈籠が二基ある。燈籠は立燈籠と雪見燈籠が一基ずつ配してある。挿絵の下方に沓脱ぎ石や縁側のふちの部分が見える。したがって、挿絵は充真院が縁側から庭を眺めて目にした景色であることが窺われる。

この家には当時、貴重な硝子をはめた珍しい障子があった。御不浄に寄木細工が施されていたことにも充真院は目を見張ったようだ。当地の名産である寄木細工は、様々な色合いの木片を幾何学模様に見えるように寄せ合わせ、寄せ合わせた面を薄く紙状にしたものを張り合わせる装飾性の高い細工である。大名家の家人である充真院でさえ、今まで見たことがない圧巻で見事な庭と、工夫された建具と御不浄らしからぬ美しい装飾が施された建物だったのである。この家で名物の安倍川餅を食べた。したがって、畑宿では工芸品・食べ物など当地の名物に親しむ機会があった。湯本から畑宿までの間を歩いて移動していた御付の女中がいたこともわかる。足元の悪い山道を、さぞ苦労したことであろう。ところで、この家について充真院は主人の姓を鈴木と記しているが、屋号についてはふれていない。畑宿の本陣若荷屋は山の水を利用した滝とたくさんの鯉を放した池が見所のすばらしい庭園があることで有名である。若荷屋では木工

品も販売していた⁽⁸⁾。充真院が書き留めた休憩した家と茗荷屋の見所は一致している。したがって、充真院が訪れた家は茗荷屋ではなからうか。

② 箱根権現

原文 ここを立出てしはらく行と箱根権現との事、右之方木の間に鳥居見ゆる、ふしおかみ木立茂りし所を出はなれ、権現様表鳥居も有て、其つづきにさゐの河原とて地藏尊之大小湖の前にならひ、誠に哀にてひとりてに念仏出る、左之方にも地藏堂有、湖の気色、人ことによきと咄し聞しか、少しうち曇、霧にてよくは見得ず、

現代語訳 烟宿を出発してしばらく進むと箱根権現があるという。右の方の木立の間に鳥居が見えた。その場で伏し拝み、木立の茂みから離れて進むと箱根権現の表鳥居の前に来た。その続きに賽の河原があり、大小の地藏が湖の前に並んでいる。たいへん不憫に感じ、我知らず念仏を唱えていた。左の方に地藏堂がある。湖の景色については、人々から良い景色であると聞いていたが、少し曇っており霧が立ち込めはつきり見えなかった。

解説 箱根権現とは現在の箱根神社のことである。箱根路沿いに位置しており、庶民からの信仰も厚かった。箱根山の山岳信仰と修験道が融合しており、神仏習合の神である。箱根権現は東海道を上る場合、向かって右前方の芦ノ湖畔に位置している。充真院は通行の途中で木立越しに鳥居を見つめ、丁寧に伏し拝んだ。そこから少し進むと表鳥居の前に来たが、境内に足を踏み入れている。この日の行程の都合もあり、参詣はしなかったのである。当時、箱根権現の鳥居は芦ノ湖を背景に朱色が映えて美しいことが有名で、歌川広重(二代目)が安政六年(一八五九)に『諸国名所百

景』の一枚として、「豆州箱根権現」と題した錦絵を上梓している。表鳥居の次に充真院の目に留まったのは、賽の河原である。三途の川の手前にあるという賽の河原は、親よりも早く亡くなった子供がここに来て石積みをする場所といわれている。子供が石を積んではそれを鬼が壊すことが繰り返されるという、慘く無常な俗信である。充真院は二十歳で男子を出産したが、早産であり子供は二日後に亡くなるという悲しい体験をしている。早世した子供にまつわる俗信の地を見て、充真院はたいへん心が痛み、念仏が自然と口から出たのである。旅に出る前に芦ノ湖の美しさを聞き、充真院はその風景を見ることを楽しみにしていたが、あいにく曇りで霧も出しており、美しい湖水の景色を見ることは残念ながら叶わなかった。

③ みるみるうちに雲に包まれる

原文 夫を過ると平地之所に出、人々余りつかれし儘、野立してたはこ杯のみ、其脇に出茶や有、あま酒名物之よし、うしろなる山より雲立のほりたる故、めつらしからんとおしへらるる、見候うちに直々駕籠の側迄烟のやうに下り来てはた成人うすうす見ゆるは、江戸にては無事と思ひつつ行すき、

現代語訳 箱根権現を通り過ぎると山を抜けて平地に出た。山道を歩き続けていた私たち一同はたいへん疲れたので、駕籠を止めて、野外であるが休憩して煙草を吸ったりした。休憩している側に、道ばたで営業している簡素な造りの甘酒が名物の茶屋がある。後方にある山から雲が立ち昇り、珍しい風景であると同行者が私に教えてくれた。その様子を眺めているうちに、直ぐに駕籠の側まで雲がまるで煙の様に下りてきて、側にいる人が霞んで見えた。このような現象

は江戸では見られないと思ひながら街道を進んだ。

解説 険しい箱根の坂道を進み続けた一行はようやく平地に着いた。皆、疲れきってしまったので、急遽、野外で休憩した。休憩している側に簡素な茶屋があり、甘酒が名物であることに充真院は注目している。充真院は甘酒を飲みたかつたのかもしれない。休憩を終えて駕籠で進んでいる時に、充真院は山から雲が立ち昇り、あつという間に下りてきた雲に包まれる経験をした。これまで江戸で人生を過ごした充真院にとって初めての出来事であった。珍しい景色であると駕籠で移動中の充真院に教えたのは、駕籠の側に付き従っている男性の家臣であろう。ここでは具体的な名前が記載されていないが、おそらく前述の佐久間泰三郎恭明であろう。佐久間はその後、三島明神を過ぎてから、充真院に駕籠の外から声をかけている様子が記されている。身分制社会である当時、この旅の主人であり元藩主政順の夫人、かつ先代藩主政義の実姉で養母でもある充真院に、直接、声をかけることは畏れおおい事であり、それが許される立場の者は一行の中でごく限られている。充真院は佐久間に声をかけられて駕籠の窓を開け、たちまち雲に包まれる現象を目の当りにしたのである。

④ 箱根の関所

原文 是より御関所ゆへ義兵衛使者に出る、前なるいかが敷茶やに、しはし待様にとの、ここよりやわやわ出し、夫にて茶のみ、皆一とうに揃居て、さたあれは揃行やうとの事、もはや済しと安内にてここを立出ると、直に御関所、順に通る、かこのすたれおろし候様大声懸、私共のかこは何事も無、次のかこはばば出、御関所之面番之方てなきかこの

戸ひらき、女ほう一人相こしも御座りまへんと云て、又其次なるも同じ様にして皆済と、直々本陣と成、柏屋といへる宿につきぬ、

現代語訳 このすぐ先に箱根の関所があるので、通行の手続きのために義兵衛が使者として関所に先行した。関所よりも手前にある立派ではない茶屋で、私たちはしばらく待つこととなった。この茶屋では牡丹餅を供している。私たちが牡丹餅を食べて茶を飲んでいると、遅れていた者たちも追いつき一行が全て揃った。義兵衛から連絡があれば、一同揃って関所を通過しようと待っていたところ、関所から通行を許可されたらと連絡が来たので茶屋を出て進むとすぐ側に関所があった。一行が順番に関所に入ると「駕籠の簾を下ろしてください」と大声をかけられた。私と光の駕籠はそのまま通過した。一方、次に通過する老女は駕籠から降り、関所で出女の取調べをする面番所の役人が、老女が乗っている駕籠の戸を開けて中を確認し、「女中一人、それ以外はいません」と声を出した。さらに次の駕籠も同様のことを繰り返して点検し、続く全ての駕籠も確認して一行は全員関所を通過した。関所を通過するとすぐに本陣に着いた。

解説 いよいよ箱根の関所である。義兵衛とは前述した斎藤義兵衛（儀兵衛）智高のことである。関所の手前には、多人数で通行する場合に使者が先行して許可を得たり、同行者一同が揃うまでの時間を過ごすのに便利な場所に、簡素な茶屋が出ていたようだ。充真院は牡丹餅を「やわやわ」と日頃用いていた女房言葉で記している。関所を通過する時に、いわゆる「出女」は関所の面番所の縁側で取り調べを受ける。充真院と光、女中らはまさに「出女」に相当する。一行の主人である充真院と光の姿は面番所の役人の目に触れない様に、二人の駕籠の簾を降ろして通過した。役人による取調べを免除されたのである。しかし、三番目の駕籠である老女、及びそれに続く女中らの駕籠は、女中が駕籠から

降り、役人が駕籠の中を不審な様子がないか調べた。身分の高い充真院や光の場合と、女中らとでは通過の際の対応が異なつた。もちろん、一行は幕府から許可を得たうえでの旅なのでやましい点はないが、難所と聞き及んでいた箱根の関所を無事に通過して、充真院をはじめ一同はほつとしたことだろう。なお、充真院が「ばば」と記した老女は砂野である。御付の女中で最高位の砂野の具体的な年齢は不明だが、当時としては女中として御使えする年齢としては高齢の範疇だったのだろう。

⑤ 箱根の本陣柏屋

原文 此本陣といへるは御上洛之節、公方様御泊りに成候とて、上段之間は締切て有、されと少々にて御通し申すとの事聞しゆへ、此座敷無とも、次広く間に合候ゆへ、入らてすきぬ、先程の品取出してここにてたへなとして、庭の方は湖むかふゆへ、夕霧深くて少しも明きね、縁之外迄も障子にて二重に成居候へとも、少しの間よりも霧うちに入、有物しめり候、きのふ之通、朝早ふといへるゆへ、又男子の方せき立んと思ひてやすみぬ、

現代語訳 この柏屋という本陣は、十四代將軍家茂が京都にお出かけになった際に宿泊なされたということで、將軍がお使いになつた上段の間は閉め切っていた。宿側は「少し準備にお待ちくださいから上段の間にお通しします」と言う。しかし、上段の間でなくても、次に広い部屋で間に合う旨を伝えて、私は滞在中に上段の間には入室しなかつた。昼に福住で食べきれず持たせてもらった料理を広げて柏屋で食べた。柏屋の庭がある方は芦ノ湖に面しており、夕霧が深く立ち込めているので少しも障子などを開くことができない。縁側の外側にも障子を設けて二重にしているけれど、

少しの隙間から霧が室内に入りこんでしまうので、室内にある物が湿気を帯びている。明日十一日も昨日九日と同様に早朝から出発するので、私はまた早起きをして、男性の御供たちに早く出発するよう催促しようと思ひ、眠りについた。

解説 充真院は柏屋に十四代將軍家茂が宿泊したと聞き、その旨を記したが、実は柏屋に家茂は宿泊しておらず、昼の休憩に立ち寄ったのである⁹⁾。家茂が柏屋を訪れたのは二月十七日である。その五十三日後に充真院は柏屋を訪れ、宿泊することとなった。充真院は柏屋で二番目に広く格が高い次の間を利用した。福住で包んでもらった料理をこの日の夕食にしているので、昼食に用意された量が実に多かつたこと、及びかなり多くの量を持ち帰つたことがわかる。充真院が柏屋に到着したのは夕方であり、霧に包まれていた湖水の風景を目にしていなが、この立地ゆえの氣象状況を体験した。霧を室内に入れないための工夫として、縁の外側にも障子を備えて二重にしている様子にも注目している。芦ノ湖沿いに位置する柏屋は、美しい水辺の風景が望める庭が見所であつた。

⑥ 四月十一日 柏屋を出発

原文 いまた明さる前に目覚しゆへ、寝わすれるよりはよき合おきよといひ、皆々支度し、六比にも成しまま、もはや出んと男ともせつきし所、今おこし来るとて揃かねしゆへ、中々立出ん気色なきまま、さあらは其枕有故皆も寝よ、我は包を枕にして揃迄やすまんとて打ふし、やうやう足元みゆるゆへ、御供揃宜とて、早おきせしかひなくつふやきつふやき出れとも、きのふ通きり深く当り候哉、我は気分悪くうつらうつらとしてあたりのことも思へす思へす、下りの山の気色おほへす、石は同しく両方より多く出て道にも敷有、御上洛より別てよく成しよし、

現代語訳 夜明け前に目覚めたが寝過ぎすよりも良いので、身近にいる女性たちに「おきなさい」と声をかけた。女性たちが出発の仕度を済ませ午前六時頃になったので、「もう出発しましょう」と男性の御供たちに催促したところ、今、起床するように言われても全員の手意が揃わないというので、すぐに出発できなかった。「それならば、枕があるので女中たちも寝なさい、私は荷物の包みを枕にして男性の御供たちが出発の準備を終えて揃うまで寝ています」といつて体を横たえた。次第に視線の先に出発の手意を済ませた男性たちの足元が見えてきて、御供たちが全員揃った。私は「早起きした甲斐がなかった」と繰り返しつつぶやきながら出発した。今朝も昨日の夕刻と同様に霧が深くひんやりとしていたからだろうか、私は気分が悪く眠気を催し、以後のことをよく覚えていない。さらに山を下った際の景色も覚えていない。坂道を下って進むとその両側から石が、十日に箱根山に入った際に見たのと同様にたくさん突き出ていて、さらに道にも石が敷いてあった。將軍家茂の上洛を契機として、道がとてもよく整備されたと聞いた。

解説 この日、充真院は一番に目覚めて、女性たちに起きるよう声をかけている。せっかく早起きをしたのに男性の御供たちの準備が整わず出発が遅れたことを充真院はとても残念に思い、つい声に出してつぶやきながら出発したのは、同様のことが前日にもあり、もはや気持ちを抑えきれなかったのだろう。とはいえ、表方の者たちを叱責せずに、独り言として収めたところが、充真院らしさといえよう。十日に箱根山に入った際に、充真院は山道の両側から石がたくさん出ていることや、道が整備されていることを記載したが、箱根山の下り坂でも再び同様の記述をしている。山道に石――実際には岩――がごっごつと出ている様子は迫力を感じただろうが、一方で道が石畳で整えられている様子に感心したのであろう。なお、「あたりのことも思へす思へす」との記述から、回想して記述していることが窺われる。

註

- (1) 充真院の旅日記(紀行文)とは明治大学博物館が所蔵する内藤政道氏寄贈書の「五十三次ねむりの合の手」「海陸返咲きこと葉の手拍子」「三下りうかぬ不調子」「午ノとし十二月より東京行日記」のことである。それらの架号は順に(一) 充真院(繁子) 関係(一) 一一、同一三、同一五、同一六である。
- (2) 拙稿「日向国延岡藩内藤充真院著「五十三次ねむりの合の手」小考」は『城西人文研究』第三四巻(令和元年)に収載した。
- (3) 伊能氏らの成果は『図書の譜 明治大学図書館紀要』第十六巻(平成二十四年)に収録されている。なお、伊能氏らが現代語訳を試みた部分で、改めて私が現代語訳を考案した箇所は本稿の①の②③と②の②③④である
- (4) 養子の寛次郎については内藤政恒著『内藤政學伝』(続群書類従完成会、昭和五十一年)の六〇、七九、一一三、一六八頁による。
- (5) 十四代將軍の江戸出発、京都到着については『新訂増補 国史大系五一 続徳川実紀第四篇』(吉川弘文館、昭和四十二年)五四九頁、五六六頁による。
- (6) 充真院が福住から貰った上下が猪口のような形の剣玉は、轆轤を用いて製作することを金子皓彦氏(國學院大學客員教授・大和市文化財審議会委員)から御教示いただいた。
- (7) 『新訂増補 国史大系五一 続徳川実紀第四篇』五六三頁の二月十七日の記載の中に、「畑二而 御小休。御小丸弁当 御上り有之。同所名産細工物等御用有之。」と家茂が畑宿で休憩したこと、当地の名産である細工

物を購入したことが記されている。

(8)

茗荷屋が本陣であったこと、及び木工品を販売していたことについては、『大日本地誌大系(二〇) 新編相模国風土記稿 第二卷』(雄山閣、平成十年) 七二頁に「往來の諸家此家を休憩所とせり、傍ら箱根細工挽物塗物の類を鬻ぐ」とある。なお、茗荷屋は当地の名主で当時の通称は畑右衛門である。

(9)

註(7)と同書・同頁によると、「九時過箱根宿本陣 御昼休 御着。九半時同所 御出立。」と、家茂が現在の十二時に箱根の本陣に到着して昼休みをとり、現在の十三時に本陣を出発したと記されている。